



今回で14回を迎えますが、当初の7回までは「街づくりの会」の単独主催であったものが、8

木屋瀬秋の風物詩「第14回 宿場まつり」が、11月5日(第一日曜日)に執り行われます。今年も各地の伝承盆踊りが一同に会しイベントを盛り上げます。

# 第14回 宿場まつり

木屋瀬秋の風物詩

みんなで踊ろう

筑前から来た

宿場まつり

# 寄せ太鼓

北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会広報部  
北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号(〒807-1261)  
TEL 093-619-1149 FAX 093-617-4949

回にして「木屋瀬地区自治区会」との共催となり、9回よりは「自治区会」「商工連盟」「老人会」「宿場踊り振興保存会」「青年会」「商業会」「資料保存会」「街づくりの会」の地元八団体で結成される「宿場まつり実行委員会」の主催へと地域全体で取組む組織構成へと推移発展し今日に至っています。内容も、当初からのキャッチコピー「みんなで踊ろう宿場まつり」は変わりませんが、予算が半減された第8回からは「宿場踊り」を中心として筑前各地

の伝承盆踊り団体が競演する「伝承盆踊りの祭典」へと発展性を目指す方向性をとり、「町並み資料館」「子供遊びす行列」「フリーマーケット」「スタンプリ」―「うまいもの市」など盛り沢山の企画を織り込んだ、他に類無き特色を持つ本物志向の文化イベントへと定着・成長して参りました。



つぎましては、今回の企画に当り地域住民の共有財産である歴史的文化財産を活かした「文化の薫るまちづくり」の推進という開催趣旨を踏まえ、今年も取組ませて戴きますので、地域の皆様にもご理解とご協力を賜りますよう、何卒、宜しくお願ひ申し上げます。

みちの郷土史料館第24回企画展

## 世界 Part 2 びっくりぞろばん展

平成18年10月14日(土)

11月19日(日)

平成16年に開催し、好評をいただいた「世界びっくりぞろばん展」の第2弾です。前回展示しきれなかったぞろばんをはじめ、世界各地の珍しいぞろばんや、ぞろばんにちなんだ品々などを展示します。お楽しみに！



## 「木屋瀬の風景」写真コンテスト 作品募集

歴史ある木屋瀬の魅力をPRし、今の風景を後世へ伝えるため、写真コンテストを実施します。感動の一枚をあなたの感性で撮ってみませんか？

■テーマ 木屋瀬の町並み、まつり、行事、神社、仏閣などの四季折々の風景

■撮影・応募期間

【前期】撮影期間：平成18年11月1日～平成19年4月30日

応募期間：平成19年5月1日～31日

【後期】撮影期間：平成19年5月1日～10月31日

応募期間：平成19年11月1日～30日

■賞 入選…前期・後期の応募作品の中から各20点  
賞金3千円、副賞として木屋瀬オリジナル図書カード千円分  
更に見事入選された40作品の中から

金賞1点…賞金3万円、副賞として北九州市観光協会賞(楯・記念品)

銀賞2点…賞金2万円、副賞として西日本産業貿易コンベンション協会賞(楯・記念品)

銅賞3点…賞金1万円、副賞として北九州写真協会賞(楯・記念品)

■審査結果発表 入選作品の発表は、木屋瀬宿記念館で行います。

【前期】平成19年6月中旬 【後期】平成19年12月中旬

応募先・お問い合わせ：北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館「木屋瀬の風景」写真コンテスト係  
電話 (093) 619-1149 月曜日休館(祝日の場合は翌日休館)



みちの郷土史料館がオープンした平成13年に「松尾家展」が開催されているので、目新しい出品がなく、二番煎じの感が強かった。

企画展示室に入って目につくのは、毛氈の上で長箱に傾けて飾った琴ではないだろうか。飾りの鼈甲もかなり剥げ落ちた、古色蒼然で誰にも歳月を感じさせる代物だった。

毎年の宿場まつりの町家展に見学に来た人々より、「古い琴ですね、江戸時代の琴ですね。」とか「ご先祖の誰が、弾かれていたのですか。」と再三にわたり尋ねられた。私自身は勿論、亡くなった母も知らなかった。

ところが、昔の行李の中より東に綴じられた送り状と領収書が、発見されて解明した。門司への港送りから博多・蔵本の間屋を経由して鉄道便、植木より川船で運ばれたのが、百十年前の明治二十九年二月であった。それで、琴の傍に置くキャプション(説明)に、「長箱入り琴壹個、金百九十円也・明治二十九年、大阪・小川平助商店」と書く。

私自身が、今回の出品でウエイトを置いて展示したのは、古文書の書き下し文である。

木屋瀬の宿駅時代に人馬継立で宿場の町役人達が、トラブルの解消に苦勞をした「覚書」を選び、頭を捻るようなくずし字の候文に挑戦して解説した。「古文書大字叢」と「くずし字解説辞典」に頼って、書き下し文が出来、来館者の目を引き付けるように、幾分か仰々しい見出しを太い字で書いた。「長崎奉行一行家来のハッピ紛失！人足を留置、明日の旅には連越する。」とか「幕府御目付一行の家来(下々)が、酒代八百文を強要。」等々で、古文書と並べて展示した。

古文書に興味をもっている方には好評だったらしく、受付に「唯、古文書だけの展示では読めないが、書き下し文や解説があったので、覚書の内容がわかった。」との満足の言葉があったようだ。



## 松尾家展

## 展示の裏話

しかし、古文書に精通している方や古文書を勉強している人達の目は厳しく、いろいろと脱字や読み違いの指摘があり、その都度の訂正等で学芸員の讀井さんに迷惑をかけた。

松尾家展が始まって幾日経った日の朝、「もしも、松尾さんの宅ですか。私は飯塚の〇〇と申しますが、…」と電話がかかってきた。その用件の内容は、長崎奉行一行家来のハッピが紛失した件の覚書と書き下し文二十三行の冒頭の文字「奉」の下二字の読みについてのお尋ねであった。私は狼狽して、手元に指摘された覚書と書き下し文の控えがないので、「今から史料館に行って、二十三行目の字句を確認して、後程回答のメールを送ります。」と言って急遽史料館に駆け込んで調べた次第である。

指摘は全く正しく、「奉各不候」(察したてまつり候)と読み違えていた。くずした字「察」を、各と不の二文字に分けて、読み書いた始末で、意味が解らないのが当然だ。私自身面目がない次第であった。

再び飯塚の〇〇さんより電話があって、「松尾さん、もう一度史料館に展示してあった古文書を読ませて下さい。九月の

四日の午後に四人の勉強仲間と自宅を訪問させて頂いた。とのことであった。私は、正直にいうと古文書に対する凄意欲に敬意を表すと共に、自分自身の不勉強さに反省をした。

結果的には、四日の飯塚の方々の来訪者との古文書の歓談で、今後の勉強の交流が深まるようだ。

(松尾 良美)

## 第二回 松尾家展

平成18年7月8日(土)～8月20日(日)  
期間中の来館者は1,679人でした。  
ご来場ありがとうございました。



今年8月の盆の三日間、木屋瀬盆踊りが行われました。13日のこやの座に始まり、本町六町、新町五町に分かれてそれぞれの屋台を曳き廻り、初盆家やお寺で踊ります。一週前から練習では参加者の少ない町内も見受けられましたが、本番には沢山の踊り手が出て来られ、大変にぎやかな庭となりました。

「今年も踊りに帰って来たばい！」という盆ぎつねの懐かしい顔や、見様見真似で七手を入れたり踊りの太鼓を打つ子供達の真剣な顔を見たとき、木屋瀬のお盆の風景、伝統が脈々と受け継がれていることに喜びを感じ、「この光景をいつまでも残したい。」そう思いました。

最後に、事前の準備や練習から本番はもちろんです。後片付けまでお世話



## 盆踊り 人と人を繋ぐ 夏の伝統行事

今年の六月「白象くんがやって来た」実行委員会と当運営協議会の共催で行い大盛況であったライブシアターのビデオ公演を夏休みイベントとして八月二十日に昼の部・夜の部と行いました。長崎から江戸に運ばれた白象くんの一生を綴った物語のビデオ化の出来栄はすばらしく、又音楽にあわせて人形の踊るボードヴィルや大きなスイングルミの白象

## 夏休みイベント



## 白象くんがやって来た

くんも登場するライブ感覚も織り込まれ大人も子供も共に楽しめる考えさせられる内容を持つハイクオリティな公演であったと感じています。尚「こやの座」のハッピでお馴染みの白象君の物語「白象くんがやって来た」は、今後「こやの座」の名物として定期公演化を考えて居りますので、宜しくお願ひ申し上げます。

こやのせ座運営部会長 柴田泰助

## ボランティア募集のご案内

木屋瀬宿記念館では「こやのせ座」の自主企画・自主運営に参加するボランティアを募集しています。木屋瀬の未来に向けて「こやのせ座」の活用に参加しませんか。年齢・性別不問。詳しくは記念館事務局(093-619-1149)までお問い合わせ下さい。

## 編集後記

いつも通っている道、いつも見慣れている場所でも季節や天気によって違う佇まいを見せます。また、そこに人が集うと風景に息づかいを感じることが出来ます。第二回写真コンテストが開かれましたが、今まで気付かなかった木屋瀬の違った一面が見えてくるかも知れません。

(た)



木屋瀬町部の本町と中町とが向かい合っている鳥町と呼んでいる通りの西の方は遠賀川の堤防で詰まっている。この堤防の上は久保崎と呼ばれ、「紀元二千十年」以前より久保崎天神さまが鎮座されていた。神木の大銀杏がありその下に門前町のたたずまいを見せて鳥町があった。

宗祇法師が筑前紀行の折りにこの地に一夜の草枕を結びその夢枕に、天神と名乗る人に扇を貰ったという話が伝えられ、この事から扇天満宮と呼ぶようになった。大川の流れを見下ろし見晴らしも良く、堤防には「もそうやね」と言っていた竹藪が堤防の上の道を守るように、左右に生い立ち遠くまで続いていた。この天神さまが遠賀川堤防の大改修の時に神木の大銀杏だけを残して今の所に移られたのである。

扇天満宮には、主に学業祈願や合格祈願のお詣りがあり、祭典日には学童を連れた親子のお詣りが多く、学芸品や手芸品等を奉納しては折り、若さ溢れる

### ウタしの昔話

【柴田豊廣遺稿集】より



お祭りであった。お宮の下の川の中島では、お祭り協賛の草競馬も奉納されていた。出走場の中には競争に馴れない馬もいたようで、競争を中途でやめる馬や、見物衆の中に跳び込む馬もいた。こうした事の方に見物衆の興味は集まっていた。太陽の下の草原にあぐらを組み、競馬見弁当や牡丹徳利のお祝い酒に酔って天下人となり「暴れ馬何物ぞ取り鎮めて見せる」と意気まっく人が、そこに現われ、あそこにも現われ取り巻き衆も勢い立ちお宮も堤防も人だかりとなり大盛況であった。

この大銀杏の側に感田町の庚申さまが鎮座されているが、お祭りでは境内に奉納余興の舞台等が作られて賑やかであった。木屋瀬に住んでいて後に日本の浪曲師となった人がいるが、この人も若い頃この舞台に立ち浪曲を奉納した事もあると言われ、実に楽しく面白くお祭りであった。感田町の町内では軒には献燈を燈し、門柱に掛行燈を燈し、お詣りの人々に門茶を振舞われる家もあつたりして下町情緒に包まれたような心が和むお祭りであった。

庶民信仰の庚申講座があつたが、この講座は友達同志や隣近所の人々で構成されるものであり自由な信仰であった。「話は庚申さまのばんに」と言われていた程に、お祭り行事が終われば酒肴を囲み話に花が咲いたというのか仲良く溶け合つて開放と自由に満ち満ちていた。

お日待と呼ぶ早朝の信仰の講座もあつた。この講座も同志で組織されるものであり、夜明け前に座元当番の家に集まり、日の出をお待ちする行事である。

### シリーズ

## 筑前木屋瀬宿 神仏めぐり

### 第八回 興玉神社

木屋瀬を象徴するかのよう、太古から遠賀川の堤防沿いに銀杏の原木が二箇所に聳え立っています。直方側の銀杏の木の下に鎮座されているのが「興玉神社」で、庚申さまとも呼ばれ、猿田彦大神を祭っています。正徳五年(1715年)の創建です。昭和九年に社殿が建立されていますが、それ以前は古式の神様の形で石の祠があつたと伝えられています。この社殿は現在感田町町内会が管理し、平成二年と十六年の二度に亘り感田町の人達の浄財で修復がなされました。

木屋瀬は江戸時代には、長崎街道筑前六宿の一つで、赤間道と分かれる追分の宿として栄え、現在も当時の宿場町の形態である都市計画がそのまま残っている貴重な地域です。宿の両入口には、「構口」を設け、「榎角」形式の道路や「矢止め」という建築様式を採用しています。また、路地には神社仏閣を配し、宿場の前と後は川と堀に囲まれた平面城郭的な作りです。「榎角」とは、前方を見えにくくす

る為直角に曲がる道路で記念館前や下町の角で見ることができ、また「矢止め」は、家並みを少しずらして建てる工法で、中町や下町で顕著に見られます。黒崎側の東構口は、現在の菜の花診療所と松本家の庭の辺りですが、遺構は残っていません。西構口は、直方市方面へ抜ける町の出口にあり、現在でも当時の石積みが残る長崎街道二十五宿の中でも当時の雰囲気を残す数少ない貴重な遺構です。西構口の前に「追分道標」の石柱が建っています。「これより、右赤間道、左飯塚道」と書かれ、裏には元文三年(1738年)と刻まれています。(現在の石柱はレプリカで本物はみちの郷土史料館に保存されています。)

この道標に従って赤間道へ進むと右側に鳥居があり「興玉神社」と名が入った額がかかり、その奥に社殿があります。巨木が聳え立ち、神が降臨されそうな鎮守の森の雰囲気があります。祭神の猿田彦大神は、神話から生まれた道案内の神様です。猿田彦神は道祖神として村境に祭られる事が多く、旅の安全や町への疫病の侵入を防ぐ神として、また、豊作、家内安全の神へと変化し、中国から伝わった道教の教えである庚申信仰と融合して、「庚申さん」として町の人達の生活と結びつき庚申祭りとして定着したのです。嘗ては境内での奉納行事に、相撲や芸能大会が盛んで、日本一の浪曲師天中軒雲月も若い時この舞台上に立っています。祭りの日には町内の軒には献燈が燈され門柱には行灯が掛けられ、お茶を振舞われる家もあり情緒溢れる祭りであつたと、町の古老は伝えて



### こやのせ たなばたまつり

8月5日。暑い夏の夕暮れ時、多くの家族連れの子供さん達が思い思いの願い事などを託して大きな七夕飾りをこやのせ座の玄関に飾りました。こやのせ座では、親子バンドでとうむしの音楽を皆で楽しんだ後、八時過ぎには外庭でよく晴れた星空に彦星と織姫星を見つけ、望遠鏡で美しい月の様子や横縞模様の木星とその周りを回っている四個のガリレオ衛星(約500年前にガリレオ・ガリレイが発見した)の不思議な様子など見ましたが、皆さんどんな感想を持ったのでしょうか。暑い中ボランティアの方々には笹を用意したり接待をしていただき、お疲れ様

こやのせ座運営部会長 長野誠一



こやのせ座運営部会長 柴田泰助

### 史跡短見

~その八~

## 東構口

木屋瀬みちの郷土史料保存会 会長 水上裕

構口(かまぐち)は、江戸時代福岡藩の宿駅やそれに準ずる所(直方・植木)に設けられた宿場の出入口の標(しるし)である。方位は南北なのに「東構口・西構口」であるのは、京都に對しての上り・下りのためと思われるが、六宿は殆んどが東西である。吉田松陰が長崎への旅の時、筑前六宿の構口に驚いているのは、長州藩にはないということである。木屋瀬では、黒崎への出口が東構口であり、飯塚への出口が西構口である。現在残っているのは市の文化財である感田町の西構口だけで、新地町の東構口は残っていない。奥村玉蘭の「筑前名所図繪(文政四年一八二一年)では紙面の最下部のため簡略に描写されているが、地元の繪師麻生東谷作と言われる「板繪着色(いたちやくしやく) 木屋瀬宿図繪馬(えま) (嘉永五年一八五二年から十年の間)では、西側の方がL字状に岡森用水路の方に屈曲している。平成13年3月と平成15年5月の二度にわたり、用水路横の庭内を発掘調査をしたところ、L字の堀の根石の大きいのはつきりと出てきて繪馬通りであった。その上、数多く出土した陶磁器も岡森用水路出現と時代的に合致することが分つたのは、大きな成果であった。



【板繪着色木屋瀬宿図繪馬】に描かれた東構口

### こやのせ座が新宗の管絃になろう? 落研大集合

夏休みも終盤の八月二十六日の昼下がりの事。福岡教育大学・下関市立大学・梅光学院大学の各落語研究会より選りすぐられた部員六名に依る発表・おさらい会が行われ「こやのせ座」は落語好きの方々や学生で賑わいました。



こやのせ座運営部会長 柴田泰助